

出会いと交流

網島梁川は、当時不治の病といわれた結核に罹り苦しみながらも、研究と文筆活動を続けました。普通の人の人生に絶望し、自暴自棄になったり、無気力になるところですが、彼は違っていました。常に死を意識しながらも限られた時間を懸命に生きて、学問と人間としての高みを目指して努力していました。そうした中で、明治37年は彼にとって大きな転機となりました。それは3回にわたる「見神の体験」でした。見神といいますが、神を見たというのではなく、神とともに在ることを実感し、絶望の苦しみから解放され希望と生きる自信を力強く持つことができたのでした。

間録」が相次いで出版されるに至って、全国的に大変な反響が沸き起こりました。見神は、単なる病人の幻覚に過ぎないとの批判もありましたが、真剣に人生の矛盾や社会不安に苦悩する当時の若者や学生たちに、多大の共感と影響を与えました。

日露戦争が終結したとはいえ12万余の戦死者を出し先行き不安な時代、「人生不可解なり」として日光の華厳の滝に飛び込んで自殺した一高(東京大学)生の話題が風靡したころでした。当時同じ一高の学生であった安倍能成が、梁川のもとを尋ね人生の悩みを語り教えを請うたのはこのような時期でした。その後も共同の翻訳活動をした、文庫本の編集者をしたり、また、死後の全集出版の立役者となるなど深いつながりを持つこととなります。

教えを求めたのは学生たちばかりでなく、文学を志す若き石川啄木や薄田泣菫らもいました。明治38年5月のある日、石川啄木は処女詩集「あこがれ」を携えて梁川の病室を訪ねました。新進気鋭の詩人ながら生活面では苦境のどん底にあった啄木は、病苦に

高梁偉人列伝 ⑳



病床でも研究と文筆活動を続けた

この体験をもとに「心のたどり」、そして「宗教上の光輝」を発表、さらに翌38年には「予が見神の実験」を発表し、「梁川文集」や「病

死後の全集出版の立役者となるなど深いつながりを持つこととなります。教えを求めたのは学生たちばかりでなく、文学を志す若き石川啄木や薄田泣菫らもいました。明治38年5月のある日、石川啄木は処女詩集「あこがれ」を携えて梁川の病室を訪ねました。新進気鋭の詩人ながら生活面では苦境のどん底にあった啄木は、病苦に

協力隊がゆく ㉒

こんにちは。長谷川です。

私事ではありますが、1月末をもって3年間の任期を終え、高梁市地域おこし協力隊を卒業します。

皆さんには大変お世話になりました。東京で生まれ育った私にはなにもかもが新しい暮らしで、車の運転からゴミ出しのルールまで、右も左も分からなかった私にご指導、ご鞭撻をいただいたことに感謝もしきれません。この場を借りて御礼申し上げます。



長谷川竜人 隊員

現在、宇治町では一般社団法人「宇治雑穀研究会」を立ち上げ、もち麦の栽培と販売、6次化に努めています。先般、その一環として、もち麦発泡酒(地ビール)「花笠」の販売を開始したところですが、この「花笠」の開発に携われたことが一番の成果かなと思っています。宇治雑穀研究会では引き続き経理担当として頑張っていく予定です。

これから新しい環境での生活が始まりますが、市内に住んでいますので、どこかで見かけたら気軽に声をかけてください。皆さん、3年間、どうもありがとうございました。

振り返ればあつという間の3年間で、人生初のいろいろな経験をすることができました。市の子育て応援ドラマ「さくらとあゆ」の制作に携われたこと、全国の雑煮を食べ比べるというイベントを企画して予想を超える評判に驚いたこと、たくさん思い出が浮かんでいきます。小学生向けの読書感想文教室、缶バッジ教室などの講師をさせていただきましたが、どれも楽しんで行うことができました。任期終了後もご要望があれば駆け付けますので、お声がけください。

高梁市の地ビールもち麦発泡酒「花笠」



宇治町では、もち麦の作付け面積を拡大中



在宅医療・介護連携推進事業通信 第37回

～食を見つめて健康生活～

岡崎 幸友 准教授(吉備国際大学社会福祉学科)

栄養委員とは、「私達の健康は私達の手で」をスローガンに活動し、健康づくりを支える地域のボランティアのことです。栄養と健康づくりに関する正しい知識を学習し、地域住民の食生活を充実させる役割を担っています。具体的な活動として、正しい食生活について広報するために、スーパーなどでの街頭活動や家庭訪問、小学校で「食べ残し」についての教育を行っています。そのほか、男性向け栄養教室の開催、小学生向けの料理教室など幅広く取り組んでいます。また、栄養委員は少数なので、市の保健師や愛育委員、食品衛生管理者などと協力して活動しているのも特徴の一つです。

今回は、コミュニティハウス湯野荘で行われた「ますます元気教室 ～骨粗しょう症の予防について～」を見学し、栄養委員の活動について取材してきました。

「ますます元気教室」は、備中地域の栄養委員が愛育委員と連携して独自に行っている介護予防教室で、備中地域内8会場で開催しています。教室では、骨粗しょう症についての説明とともに、食事や運動など、予防法についての話を聞いたあと、体操や調理実習を楽しく行いました。

忙しいときなどは食事も簡素になったり、運動も後回しにしてしまったりします。しかし、いつまでもいきいきと自分らしく生活するためには、健康な体づくりは欠かせません。普段から食事に気を遣い、少しずつでも運動を続けることが大切であることを改めて学ぶ機会となりました。

高梁市栄養改善協議会連合会備中支部の長江絹代さんは、「この教室に参加される皆さん、参加した人から健康情報を得ている地域の人たちとの繋がりによって、地域の健康づくりが進められていると感じています。市内でも高齢化が進んでいる備中地域では、孤食や栄養の偏りなど、高齢者の食生活に関する課題もたくさんあります。地域の活動の中でどのような支援ができるか考えていきたい」と話されていました。

☎医療連携課 ☎(21) 0304



自宅にて家族らとの撮影。真ん中(奥)が梁川。

も多かった様子から窺えます。「あなたとは同じ高梁川の上流と下流に生を受け」という格別な縁を感じます。」などと手紙の1節に書いていま

す。泣菫もまた梁川の死後弔文を遺し、「まるで宵の明星が消えたようだ。」と残念がっています。その外にも宗教家として活躍した西田天香が度々病床の梁川を尋ねています。天香は無一物、禁欲、内省の信仰生活に入り、京都に一燈園を開き、托鉢、奉仕、懺悔の生活を説いた人で、梁川も彼の行動力、実践力には敬服していたようです。天香もまた梁川に対し、「文章が立派だから価値を高めたのではなく、何事にも『命がけ』で取り組んだことだ。一言半句の談話にも命をかけた。」と述べています。また、「不如帰」や「自然と人生」で一躍文名をあげた徳富蘆花も病床の梁川を訪ね談話し、その人格と人柄、学問の深さに敬服しています。「彼は私たちが生涯かけて探し求めるものを探し出して堂々と凱旋した。」と死後追想して述べています。このように梁川は病苦と闘いながらも文筆活動を続ける傍ら、数多くの訪問者への対応や手紙での質問等に丁寧に回答する日々を送っていました。(次号へつづく)